

展示室1「人間像」B2パネル 1/1

目は口ほどに

「目は口ほどに物を言う」ということわざがあるように、私たちは他者の眼差しから言葉と同じくらい、あるいはそれ以上に多くの感情や意図を読み取ろうとします。

当館のコレクションは「人間像」を収集方針の柱の一つとしており、人物の目が印象的に表された作品を数多く所蔵しています。本展では、「目」の表現に注目し、作品における「目」が鑑賞者にどのように働きかけているのかを探ります。

第1章「日本画のこころ」、第2章「いろいろな目」、第3章「まなざしのゆくえ」、第4章「目はないけれど」の4つの章を設けて作品をご紹介します。

また、昨年度新たに収集した谷原菜摘子の〈方舟はもう現れない〉を初公開いたしますので、ぜひご注目ください。

※会期中、展示替えを行います。

The eyes say more than the mouth

As the Japanese proverb "The eyes say more than the mouth" suggests, we often attempt to decipher emotions and intentions from another's gaze as much as—or even more than—from their words.

One of our museum's core collecting policies focuses on "The Human Figure," and as a result, our collection includes many works where the eyes are depicted with striking intensity. This exhibition focuses on the expression of "eyes," exploring how they interact with and influence the viewer.

The exhibition is organized into the following four chapters:

Chapter 1: The Spirit of *Nihonga*

Chapter 2: Diverse Expressions of the Eyes

Chapter 3: Where the Gaze Leads

Chapter 4: Beyond the Visible Eye

Additionally, we are proud to present the first public showing of Natsuko Tanihara's *The Ark Will No Longer Appear*, which was newly acquired by the museum last year. We hope you enjoy this special highlight.

* A part of this exhibition will be changed during the exhibition period.

展示室1「人間像」B3パネル 1/5

第1章「日本画のこころ」

本章では、日本画における目の表現に注目します。細い一本の線で目を描く「引目^{ひきめ}」や、目線を下に向ける「伏し目」、あえて鑑賞者からそらした視線など、日本画には特徴的な目の描き方があります。このような目の表現は、描かれた人物の気品や情緒といった内面を反映していると言えます。

村上華岳、中村大三郎、梶原緋佐子は、舞妓の姿を描いています。

村上は、斜め下に目線を落として舞う姿を繊細な線と色彩で表現しています。そこには、浮遊感をはらんだ妖艶な空気が漂っています。中村が描いた舞妓は、切れ長の大きな目をしています。その静かな眼差しからは、落ち着いた優美な舞が想像されます。梶原は、投扇興^{とうせんきょう}*という伝統的な遊びをする様子を表しています。的や対戦相手を真っ直ぐに見つめる視線には、遊びを楽しむ無邪気さが溢れています。

同じ舞妓の姿でも、目の描かれ方は全く異なり、それぞれの内面を多彩に描き出しています。

人物の「目」を手がかりに、日本画に表現された繊細な心の機微に触れてみてください。

* 日本の江戸時代中期から親しまれている遊び。台の上に「蝶」と呼ばれる的を立て、蝶をめがけて扇を投げる。的と扇の落ち方によって点数を競う。

展示室1「人間像」B3パネル 2/5

第1章「日本画のこころ」

本章では、日本画における目の表現に注目します。細い一本の線で目を描く「引目^{ひきめ}」や、目線を下に向ける「伏し目」、あえて鑑賞者からそらした視線など、日本画には特徴的な目の描き方があります。このような目の表現は、描かれた人物の気品や情緒といった内面を反映していると言えます。

岡本神草と谷角日沙春は、髪を整える女性の姿を画題としています。岡本は、繊細な線描で目を表し、谷角は、右上に目線をそらした表情を描いています。視線を伏せ、あるいはそらすことで、奥ゆかしさの中に潜む妖艶な官能性がより一層引き立てられています。

秦テルヲと廣島晃甫は、母親の姿を描いています。秦は、まるで仏像を思わせる穏やかな目で、眠る子を抱く様子表現しています。一方で、廣島が描いた母は、張ってきた乳をただ一人でしぼっています。子を亡くしたのか、あるいは生き別れてしまったのか、その眼差しはどこか哀愁を帯びています。表現の趣は異なりますが、どちらの作品からも、我が子を思う母の深い愛情が静かに伝わってきます。

人物の「目」を手がかりに、日本画に表現された繊細な心の機微に触れてみてください。

展示室1「人間像」B3パネル 3/5

第2章「いろいろな目」

「^{がりょうてんせい}画竜点睛」とは、物事を完成するために加える最も重要な仕上げを指します。この言葉は、ある画家が描いた竜に瞳を描き入れた途端、その竜が本物となって天に昇ったという中国の故事に由来します。

この言葉のとおり、美術作品における「目」は、最も重要な部分の一つということができます。本章では、目をはじめとした造形表現に特徴のある作品をご紹介します。

細川宗英の作品は、『^{しょうぼうげんぞう}正法眼蔵』を著した曹洞宗の開祖である道元の頭像です。注目すべきは、義眼が使われている点です。生命力さえ感じさせるその目は、対峙する者に生の本質を説いているかのようです。

パブロ・ピカソは、三次元の対象を多方向から捉え、二次元に再構成するキュビズムの手法により、正面と横から見た目を一つの顔の中に表現しています。くっきりとした二重や長いまつ毛など、恋人ドラ・マールの姿を優美に描き出しています。

マックス・エルンストは、2羽の鳥の目にも、あるいは人間の目にも見える不思議な肖像を作り出しています。鳥を自身の内面を象徴した分身と捉え、シュルレアリスト*として真の現実とは何かを問い続けました。

同じ目でも、多種多様な造形的アプローチを見出すことができます。それぞれの作家が施した独創的な目の表現は、まさに作品に命を吹き込んだと言えるでしょう。

* シュルレアリスム（超現実主義）と呼ばれる、20世紀の芸術運動に参加した芸術家たち。彼らは、理性によるコントロールを排し、夢や無意識の力によって真の現実を捉えようとした。

展示室1「人間像」B3パネル 4/5

第3章「まなざしのゆくえ」

「まなざし」とは、対象に向けた単なる目の動きだけではなく、そこに込められた感情や意図も含んでいます。本章では、作品の登場人物たちのまなざしに注目し、その訴えや問いかけに迫っていきます。

はじめに、昨年度新たに当館のコレクションに加わった、谷原菜摘子の〈方舟はもう現れない〉をご紹介します。複数のリカちゃん人形とともに、谷原自身が広い海の中を漂っています。その力強いまなざしからは、救いとなる方舟が現れなくとも、自分自身に従って生き抜いていく意志と覚悟が感じられます。

シンディ・シャーマンは、映画や雑誌などを題材に、自作自演のシーンを撮影しています。その強調された演技とまなざしからは、社会が要求する女性らしさを揺さぶり、問い直そうとする姿勢が見出せます。

浜田知明の彫刻は、相手の顔を見ることも、自分自身を見ることもできない二人の人物を表しています。自分も他者も、結局のところ真の正体は分からないことを、巧みな空間構成とユーモアによって表現しています。

作品に表現された、まなざしのゆくえを辿ることで、作家の意図も、そして自分自身も見つめ直す体験となるはずです。

展示室1「人間像」B3パネル 5/5

第4章「目はないけれど」

本展の最後に、目が明確に表現されていない人間像作品をご紹介します。目が表されていない、または抽象化されている作品において、想像される視線や、目が無いことの意味や効果について考えを巡らせてみましょう。

村上早は、自身の体験に根差した心や体の痛みを銅板に刻み込んでいます。作品の登場人物には目や表情は表されず、画面の不穏さが増すとともに、普遍的な人間の心の闇を感じ取れます。

トム・ウェッセルマンは、単純な描線によって女性のヌードを表現しています。目はありませんが、唇や乳房など性的な要素は鮮やかに強調されています。消費社会における匿名化された女性像を軽やかに作り出しています。

トニー・クラッグの彫刻は、一見すると有機的な物質の単なる積み重なりのように見えますが、多方向から眺めるうちに人物の横顔が浮かび上がってきます。私たち鑑賞者からも作品からも、様々な視線の動きが生み出されます。

目はあってもなくても、口ほどに物を言う。――私たち人間にとって、「目」というものが単なる視覚情報の受容器官としてだけでなく、意志の伝達器官として大いに働きかけていることがよく分かります。

人間像作品の鑑賞において、まず「目」に注目してみることは、作品の核に触れるための重要な手がかりとなります。きっとあなたに対して、口ほどに物を言うに違いありません。

展示室1「現代版画」B2パネル 1/1

現代版画

人間像と並ぶ、当館のもう一つの具体的な収集テーマが「現代版画」です。写真や印刷などのテクノロジーの発達は、私たちの暮らしはもちろんのこと、20世紀以降の美術をとりまくビジュアル文化を大きく変えてきました。今の時代の美術をとらえるとき、「現代版画」はすぐれた切り口になると思われまます。

今年度のこのコーナーでは、様々な鑑賞の観点から、版画の魅力を探っていきます。

4月11日-5月10日	ハンガはメディアだ
5月12日-6月7日	ハンガ、色彩の魔術
6月9日-7月5日	ハンガそれは生の刻印
7月11日-8月2日	絵をみて、そうぞう きこえる音は? 1
8月4日-9月6日	絵をみて、そうぞう きこえる音は? 2
9月8日-9月30日	絵をみて、そうぞう きこえる音は? 3

Contemporary Prints

Tokushima Modern Art Museum maintains a wide-ranging and high-quality collection of contemporary prints made by Japanese and overseas artists. Printmaking constitutes a very important category within modern and contemporary art, and has been practiced not only by dedicated printmakers but also painters, sculptors, and artists working in other mediums.

Printmaking is media: 4 April - 10 May

Printmaking, magic for colors: 12 May - 7 June

Printmaking, it's the mark of life: 9 June - 5 July

Let's imagine from the picture. What sounds come to mind?

1st term: 11 July - 2 August

2nd term: 4 August - 6 September

3rd term: 8 September - 30 September

展示室1「現代版画」B3パネル 1/3

ハンガはメディアだ

版画は、複数刷ることができるため、マスメディアのように同時に多くのイメージを人に届けます。また版を介して表現するという間接性から、情報の変換や、版材に即した物質感が生じます。版画は他の絵画分野にはない、メディア性を秘めているがゆえに、時代の視覚文化に呼応し、版画の概念をも柔軟に変化させてきました。版画表現が持つメディア性の面から、作品をご紹介します。

展示室1「現代版画」B3パネル 2/3

ハンガ、色彩の魔術

技法の違いはあっても、版という一面の層によって絵柄が印刷される仕組みは、版画に共通のもので、そこから独特の発色が生まれます。ムラのない色面、途切れなく一気に形を描く線、ぼかしやかすれも一つの面の中で均質な調子をつくる。水彩画や色鉛筆などとはかなり違った、色の現れ方が、版画ならではの色の魅力を広げます。色の効果の面から、作品をご紹介します。

展示室1「現代版画」B3パネル 3/3

ハンガそれは生の刻印

版画は、木や銅板などの材料で版をつくり、そこで生まれる線には、素材の特性や材料と格闘した作家の身体性が色濃くあらわれるという点が版表現の大きな特徴です。線を刻み、圧をかけて絵柄を版から刷り取り、あるいは複数の絵柄を突き合わせて刷り重ねるといった、イメージが仕込まれるプロセスは、版画表現に独特のつよさを与えます。版の刻まれ方の面から、作品をご紹介します。

展示室2「徳島ゆかりの美術」B2パネル 1/1

子どもたちに伝える、徳島ゆかりの美術

当館では、徳島ゆかりの作家の作品や、徳島の風景を描いた作品を収集しています。これまで、学校連携事業などを通して、多くの子どもたちとその魅力を分かち合ってきました。

本展では、全国的な舞台で活躍した、三宅克己、伊原宇三郎、日下八光の作品から、子どもたちが特に心動かした作品を厳選して展示します。作品横のパネルでは、様々な年齢の子どもたちとの鑑賞の対話記録をご紹介します。

教員や美術館職員の問いかけに応え、じっくりと観察し、想像を広げて生まれた言葉たちです。自らの力で鑑賞を楽しむ子どもたちの言葉は、大人の視点をほぐし、新しい発見へと導いてくれるはずです。

子どもたちに伝えてきた徳島ゆかりの美術に、大人のみなさんが新たな目に出合う機会となれば幸いです。子どもたちとの対話をヒントに、自分ならどう応えるか想像しつつ、お楽しみください。

*会期中、展示替えを行います。

Art and Artists Associated with Tokushima : Sharing our collection with Children

The Tokushima Modern Art Museum collects works by artists associated with Tokushima Prefecture, and works inspired by views and subjects unique to the area. Through school partnership programs and other initiatives, we have enjoyed art appreciation with many children.

This exhibition features works by Kokki Miyake, Usaburo Ihara, and Hakko Kusaka — artists who achieved national acclaim—focusing on the pieces that sparked the strongest reactions from children. On the panels next to the artworks, we have taken a different approach from usual by presenting excerpts from conversations recorded during art appreciation sessions with children at various stages of development.

These words emerged as children responded to prompts from teachers and museum staff, observing closely and letting their imaginations soar. The words of children enjoying art appreciation on their own terms will surely help ease adult perspectives and lead to new discoveries.

Using the children's words as a guide, we invite you to find your own answers to the questions posed and enjoy the art associated with Tokushima with fresh eyes.

* A part of this exhibition will be changed during the exhibition period.

展示室2「徳島ゆかりの美術」B3 パネル 1/3

子どもたちと鑑賞する三宅克己作品

三宅克己^{きつぎ}は、1874年、現在の徳島市に生まれ、6歳の時に家族で東京に移住しました。17歳の時、イギリスの水彩画に感動して水彩画家を目指すようになり、20代前半で、あこがれのイギリスを訪ねます。海外旅行が困難だった時代に、日本各地や世界中を旅して風景を描き続けました。水彩絵具で油彩画に負けない優れた作品が描けるよう努力し、描き方の本も出版するなど、水彩画の普及に情熱を注ぎました。1954年に80歳で亡くなりました。

子どもたちと鑑賞する際、風景という題材は、観察による発見や、絵の中に入り込むような想像力を働かせるのに向いています。大人が見逃しがちな細部に気づいたり、画面に描かれていないことまで想像したりするのが子どもたちは得意です。また、水彩絵具は、図工の授業などで使い慣れた身近な道具です。技法への興味も湧きやすく、親しみを持って作品と向き合うことができます。

展示室2「徳島ゆかりの美術」B3 パネル 2/3

子どもたちと鑑賞する伊原宇三郎作品

伊原宇三郎は、1894年に徳島市で生まれました。東京美術学校（今の東京藝術大学）に進んで学び、30代前半には、フランス・パリへ留学して、西洋絵画の伝統を熱心に吸収しました。当時注目されていたピカソの模写を通して、新しさの中にある伝統を肌で感じ、その基礎を日本に根付かせようと尽力しました。雑誌の表紙絵や挿絵も多く手がけています。1976年に81歳で亡くなりました。

伊原が描いた人物・静物・風景など多様な作品に合わせ、子どもたちへの問いかけも工夫を凝らしてきました。例えば、お気に入りの構図である「開いた窓と室内」では、窓の内外を行き来するように想像力を膨らませます。会場設置のタブレットでは、完成作と習作を比べてご覧いただけます。作品創作の過程を探ってみてください。「作品に賞をプレゼントしよう」と考える活動も、自由な視点で魅力を発見できるために人気です。伊原作品に限らず楽しめるはずですので、考えを巡らせてみてください。

展示室2「徳島ゆかりの美術」B3 パネル 3/3

子どもたちと鑑賞する日下八光作品

日下八光（本名は喜一郎）は、1899年に那賀郡羽ノ浦町（今の阿南市）に生まれました。東京美術学校（今の東京藝術大学）で日本画を学び、伝統的な技法を重んじながら、新しい表現を追い求めました。優れた風景画を描いた一方で、古墳にある壁画の模写・研究にも情熱を注ぎ、高く評価されています。特別展「生誕100年 吹田文明の人生でたどる版画100年のドラマ」（会期：4月25日～6月28日）で紹介している吹田文明とは同じ阿南市出身で、助言したこともあるそうです。1996年に96歳で亡くなりました。

久しぶりに東京から帰郷した際に描かれた〈阿南の海〉（前期展示）や〈阿南北の脇海岸〉（後期展示）は、徳島の子どもたちにとって自分たちの生活とのつながりを感じやすく、ひときわ強い興味を持って鑑賞できる作品です。描き込まれた要素も多く、発見する楽しさが詰まっています。風景と共に動物が描かれた作品も子どもたちに人気です。表情や仕草から心情を推し量る鑑賞活動では、子どもたちの自由で豊かな想像力が存分に発揮されます。